

一帯一路とユーラシア広域交易圏 セミナー

運輸総合研究所 宿利会長挨拶

令和元年6月24日（月）15：00～18：00

皆様、こんにちは。セミナーに多数ご参加いただきまして、心から感謝申し上げます。今日は「一帯一路とユーラシア広域交易圏セミナー、激動の国際社会の中、我々は何をすべきか」というテーマで開催いたしました。

「一帯一路」の話は、2013年に習近平主席が大構想として打ち出したとき、中国は片方で中華民族の歴史的な「偉大なる復興」という大きなスローガンを掲げておりましたし、2013年は日本にとりましては日中関係が最悪な時期でもありましたから、この大構想が、外交上あるいは国際政治の中では日本の関係者にとってはネガティブに受け止めざるを得ない状況にあったのではないかと私は振り返ってみて思うわけであります。ギリシャのピレウスの港の話とか、スリランカのハンバントータ港の話とか、そういう長期的に港湾の運営管理権を中国が取得するという、あるいは「債務の罠」という問題とか色々あって、やっぱり少しバイアスがかかってきたことは確かであります。

私自身も2014年から一般社団法人国際高速鉄道協会（IHRA -International High-speed Rail Association）の活動がスタートしまして、アセアンを中心としてインド、オーストラリアに何度も出かけていきますと、段々日を追って特にアセアンの国で、この一帯一路に関連するプロジェクトの話が常に底流にあるいは直接的な話題に上がってくるようになりました。実感するのは、1つはこれらの国はとにかくインフラの整備が急務であるということ。もう1つはやはり今やアセアン諸国は中国と大変緊密な経済関係を構築しておりますから、中国抜きで政治や経済が成り立っていないこと。そしてもう1つは、債務の罠や覇権に関する非常な警戒感があってこの三者が織り交ぜになって話題になってくるということではなかったかなと思います。

しかし今日お集まりいただきました運輸交通関係者はこれをどうとらえるかというのは全く別の話、あるいはもう少し別のポジションから見る必要があるのではないかと。なぜなら国際交通、あるいは国際物流、国際交易、あるいはそこで具体的なプロジェクトとして挙げられているプロジェクトは、ここにお集まりの関係者にとっては無縁ではなくて、非常に大きなインパクトを現に与えている、そういうものでありますから、私たちが考えるべきはもう少し別のことを考え方がよいのではないかと。即ち国際政治や外交という切り口はもちろん重要であります、加えて経済的な観点、あるいは今申し上げたような色々な観点を同時に見ておく必要がある。そういう意味で2つのことが大事だと思いますが、1つは客観的に事実を捉え、それを追いかけて冷静であること。もう1つは、やはり歴史的あるいは地政学的にきちっと押さえて、世界の大きな流れの中でそれを位置付けて鳥瞰図的にこの問題を見られるかどうかということにかかっているのではないかと。

家田先生からは「一帯一路」をどう読み解くか、モンゴル帝国が築いた寛容なユーラシア広域交易圏を振り返りつつ、モンゴル帝国が築いた寛容さというのを歴史的、地理的に鳥瞰していただいて、その後国際物流の専門家である柴崎さんと山口さんから「海上」あるいは「陸上」というそれぞれの切り口から具体的にそれを読み解いていただきます。その後、運輸総合研究所所長の山内先生にコーディネーターになっていただいて、これを議論の中で深めていくセミナーにしたいと思っております。

今回のセミナーが「一帯一路」に関する皆様方の必ずしもはっきりしなかったところが、今回の講師の話やディスカッションを通じて整理していただいて考察を深め、皆様それぞれの活動のお役に立てることになれば私どもとしては幸いだと思っております。改めて本日のセミナーにご協力いただきました皆様、またご参加いただきました多くの皆様に感謝申し上げます、開会のあいさつとさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

(以上)